

山の本を楽しむ

藤井 論

第3回 エルゾーク著「処女峰アンナプルナ」

【概要】

近藤等訳による人類初の8000メートル峰登頂の記録である。1960年に出版され、1,100万部も発行されて世界の人々から読まれた名著である。日本では白水社から出版された。1950年6月3日、ふたりの男が酸素の希薄な高所に苦しみながら、吹きすさぶ烈風の中を、ヒマラヤの、とある山頂めざして登っていた。午後2時、ついにこのふたりは頂上に登りつき、ピッケルの先にゆわえた小さな三角旗をうち振った。この山こそ、人間が登頂に成功した最初の8000メートル峰のアンナプルナであった。「処女峰アンナプルナ」は、エルゾーク隊長がフランスに帰国後、パリの病院で、凍傷治療のための8回の手術のあいまに、当時の凄惨さを回想して、涙にむせびながら、6か月がかりで口述したアンナプルナ征服の物語である。

【内容のポイントと感想】

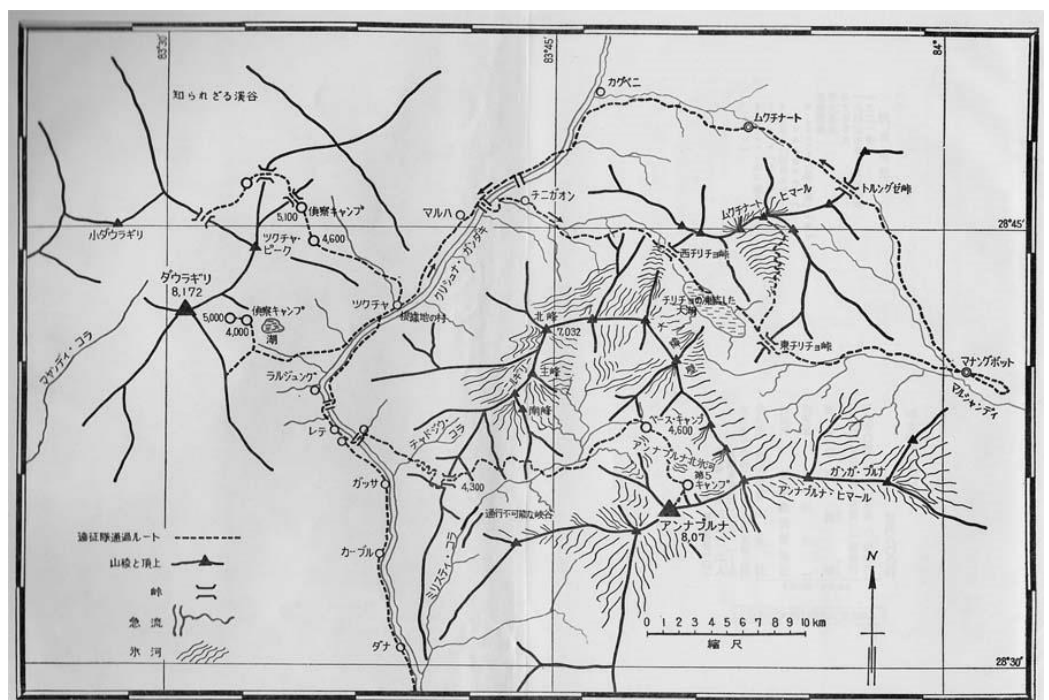
この本は、後にドゴール政権のスポーツ大臣を務め又フランス・シャモニーの市長となった、モーリス・エルゾークによって執筆された。彼は1950年のフランス登山隊の隊長として参加し、隊員のラシュナルと共に人類初の8000m峰登頂者としてアンナプルナI峰の山頂に立った。アンナプルナ登頂こそは、大自然と人類との戦いの最前線において勝ち取られた、人間の意志の勝利であると言わなければならない。

しかし、その勝利の代償として、エルゾーク隊長は手足の指を、ラシュナルは足の指を、凍傷のために犠牲にしなければならなかった。

この遠征の記録は、実に精細をきわめ、山と、そこに行動する人間の気持を実にみごとに書きつづったもので、さすがに文学の国、フランスの伝統を感じさせる。きよらかな興奮のうちに、人間の生きる力を与えてくれるような、まれな書物のひとつと言える。

図はフランス隊のたどったル

ート図である。当時のヒマラヤ地図はあってもないようなもので、この山域は特に未知な箇所が多く、ダウラギリ、アンナプルナのどちらに登るかは現場での調査次第で決めるしかなかった。ツクチャを起点にいくつかのルート工作をした結果、最初はダウラギリを目指したが、どのルートも高い氷壁に囲まれて登頂不可能な山と結論づけた。並行して別の隊員は、アンナプルナの登頂ルートをさぐった。そのひとつがチリチョ峠を越えて東側に回る、というものだった。しかし東側に聳える「大障壁」には



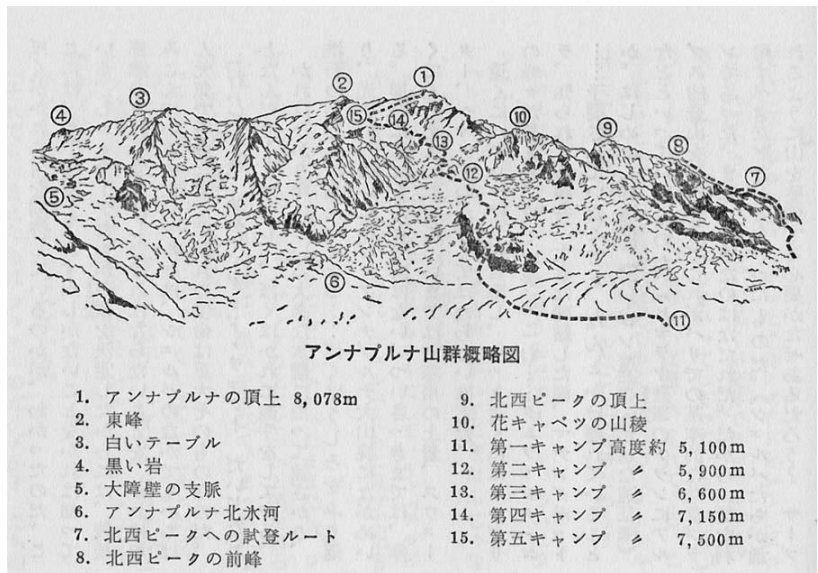
ダウラギリ・アンナプルナ調査、登頂ルートの全体図

ばまれ、登頂は不可能であった。最後の頼みは「ミリスティ・コラ」に沿って入るルートであるが、通行不能なゴルジュ帯があるため、ニルギリ南西尾根を越える道を切り開き、やっとミリスティ・コラに入ることができた。そしてついに山頂の見える氷河にたどりつき、「アンナプルナ氷河」と命名してベースキャンプを設営する。次はこの時の記述で、世界で初めて登頂ルートを発見した時のワクワク感が伝わってくる文章だ。

その翌日には、はたしてびっくりするような光景が待ち受けていた。ぼくが目をさましたころ、ラシュナルとレビュファは、外のかわいた岩の上に、腰をおろし、アンナプルナをじっと見つめていた。

突然「ルートを見つけたぞ！」と叫ぶラシュナルの声に、ぼくはテントをとびだした。彼のところに行く。照り返しに目がくらむほどで、目をしばたかかねばならない。はじめて、アンナプルナはその秘密のベールをぬぎとったのだ。氷の首飾りをつけた広大な北斜面は、ぎらぎらとひかり輝いている。こんなに、とてつもなく大きな山はこれまで見たことがない。それは薄紅色に輝く、威嚇的な世界であり、目では追ってゆけないほどだ。しかしわれわれの眼前にあるのは、すべての登攀計画を空想に終わらせるような垂直な岩壁、ぎざぎざに切れた山稜、懸垂氷河ではないのだ。

ベースキャンプからは右図の“アンナプルナ概略図”のように、⑪の第一キャンプから第二キャンプ、・・・、⑮の第五キャンプへと高度をあげ、①の山頂へのアタックを迎えることになる。五つのキャンプの設営にあたっては隊員はもちろんのこと、8人の優秀なシェルパも加わった命がけの一大プロジェクトであった。隊員はラシュナル、エルゾーク、ウドー、ノアイエル、レビュファ、テレイ、イシャック、シャッツ、クジーの9名。ラシュナル、テレイ、レビュファはシャモニーのガイドでプロだ。映画でも有名になったガストン・レビュファの名前を知る人は多いだろう。これにエルゾークとシャッツ、クジーが加わりアタック隊となった。イシャックは報道カメラマン、ノアイエルはスポークスマン、そしてウドーは外科医で登山にも詳しい。フランス山岳界の精鋭と専門家を集めた強力なチームだ。最初の頂上アタックはテレイとレビュファが試みたがラッセルが厳しくて撤退、そして次の文章のように、エルゾークとラシュナルによる人類初の8000メートル峰登頂の日を迎える。



われわれは、一歩ごとに立ち止まりながら、前後して登る。ピッケルの上にもたれかかって、呼吸を取りもどし、破れんばかりの心臓の鼓動を沈めようとする。

もうすぐ、目的が達成できるのだ。いかなる障害もわれわれを引き止めることはできない。おたがいに相談する必要もない。相手の目の中には確固たる決意を読み取るだけだ。左にちょっとそれ、なお数歩・・・頂上は知らぬまに近づいてくる。岩の塊をいくつか避ける。ふたりは、やっとのことでからだを持ち上げる。本当だろうか？・・・本当だとも！烈風がほうを打つ。われわれはいるのだ・・・アンナプルナの頂上に。8078メートル！われわれの心から、言い現わすことのできない歓喜があふれる。

「ああ、みんな！仲間たちみんなが知ってくれたらなあ！」みんなが知ってくれたら！

頂上は、雪庇をなした氷の山稜だ。その向こう側は、身をすいこまれるようなおそろしい絶壁で、われわれの足の下を垂直に落ちこんでいる。世界の他のいかなる山も、こんなものすごいものは、めったにあるまい。雲が山の中腹にたどよい、7000メートル下の温和で肥沃なポカラの渓谷をつつんでいる。頭上には、なにもない。

使命は果たされたのだ。いや、それよりもずっと偉大な、ある一つのことが成就されたのだ。人生はなんとすばらしいものだろう！

ほとんどの登山映画・ドラマやドキュメンタリーはここで終わってしまう。しかしこの本はこれで終わらないところが気に入った。凄惨な下りと撤退の様子がこの本の核心でもある。次にその一節を抜書する。

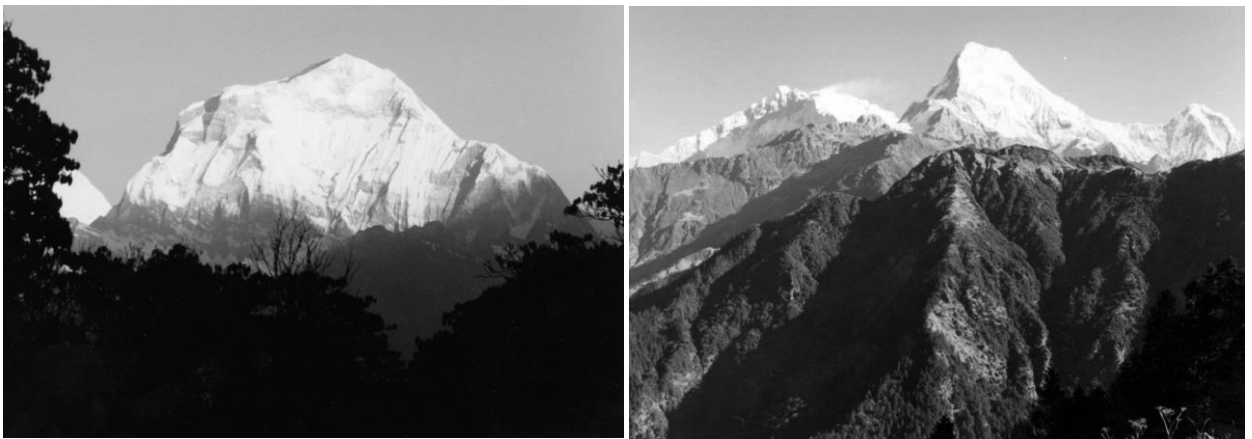
山から、すっかり撤退した。全員が第二キャンプに集合している。しかし、なんというありさまだ！・・・いまや指揮はウードにゆだねられている。かれは手早く診察する。われわれの悲惨な状態を前にして、ジャック・ウードの顔には、山仲間としての心の乱れと、医者としての冷静な厳格さが、かわるがわる反映する。

かれはまっ先にぼくを診察する。ぼくの手足はくるぶしと、手首の上部まで感覚がない。手は、ぞっとするほどひどい。皮膚はもう残っていないも同然で、わずかにあるところは、黒ずんでいて、長い肉片がぶらさがっている。指はふくれあがり、ひきつっている。両足も似たりよつたりの悪い状態で、足の裏はすっかり紫がかった褐色で、感覚が全然ない。

ぼくはウードの第一印象を知ることが心配だった。「どう思う？」ぼくはなんといわれても動揺しないように、心の準備をととのえて質問する。

「ひどい。手足の一部分はたぶん失われねばなるまい。しかし、いまはそれ以上のことは、はっきりいえない」「すこしましなところは、助かると思うかい？」「そりゃもちろんだ。ぼくはできるだけのことをするよ」

こうした会話も、ぼくを元気づけてはくれない。ぼくとしてはもう疑いなしだ。手足を切断しなくてははならないのだ。



ダウラギリ（左）とアンナプルナ（右）

私は1979年1月に新婚旅行（妻には不評だったが）で、トレッキングでポカラとブーンヒルの間を一周した。右上写真はアンナプルナ山群の写真で、ゴラパニ峠から撮ったものである。手前の三角のピークはアンナプルナ南峰で、その左奥に雪煙を上げているのがアンナプルナI峰(8091m)である。この最高峰はこの峠まで登らないと見えず、アンナプルナ山群の奥のまた奥にある。エルゾークたちはさらにその裏側の氷河にルートを見つけ出し、登頂に成功したことになる。

左上写真はダウラギリ主峰(8167m)である。ゴラパニ峠に登ると初めて、正面にこの世界一高い“白い山”が聳えて見える。その姿は神々しくまた巨大で、そしてどこを見ても急でエルゾーク隊がギブアップした山である。私にとってもヒマラヤはとても大きく、フランス隊の偉業を実感したトレッキングだった。（つづく）